

アトリエ 琉游舎 だより 154号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2023年6月7日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

野の道や童蛇打つ麦の秋



子規

- 小津安二郎監督の映画に「麦秋」という名作があります。なかなか結婚しない娘と彼女を心配する家族の日常を描いた、原節子主演の映画です。不明を恥じずに申し上げれば、私は麦秋を麦が芽を出して晩秋に麦踏をする頃と思い込んでいました。麦秋は麦の穂が実り収穫期を迎えた初夏のころの季節だったのです。つまり梅雨入り直前の爽やかな季節。
- 麦秋（麦の秋）は夏の季語です。なぜ秋という言葉がつけられたかと言えば、農家にとっては作物の収穫期は「秋」だったのでしょう。だから麦には今の季節が「秋」なのです。
- 正岡子規の句「野の道や童蛇打つ麦の秋」も今の時期の点景です。雨上がりのあと太陽が照りつけると蛇が活動を始めます。コリーナもこの時期は草むらや道路を横断する蛇を頻繁に見かけます。遠目に長いもの、例えば枝や蔓などが落ちてるとハッとすること度々です。
- 子供は無邪気なので、おそらく麦畑のあぜ道の草むらで蛇を見つけ、刈り取り直前の麦穂を引っっこ抜いて、それで蛇を打って遊んでいる光景を読んだ句のようです。楽しそうです。
- 学校の帰り道、子供たちは虫や草やいろいろなものを見つけてはそれをおもちゃにして友達同士でふざけ合ったり生き物の観察をしたりしながら、興味を拡げコミュニケーションを豊かにしてきたに違いありません。最近ではあぜ道や用水沿いを歩くことは禁じられているのか、下校途中の子供同士がふざけ合ったり、何かを観察している姿を見かけなくなりました。
- ネットに驚くような記事が出ていました『田んぼの持ち主様へカエルの鳴き声による騒音に毎年悩まされています。鳴き声が煩くて眠ることができず非常に苦痛です。騒音対策のご対応をお願いします。』との張り紙が道端にあったのです。コメントのしようがありません。とんでもないクレーマーだと非難することは簡単ですが、私たちもこのような考えに陥っていないか顧みるためにも、たまには車を降りて、駅までのあぜ道をカエルや麦穂や雑草や蛇や昆虫たちの自然とコミュニケーションを取りながら歩くことも必要なのかもしれない。

6・7月スケジュール

月 火 水

12	13	14	8	9	10	11
	読書会 13時半から		映画会 お休み			
19			映画会 13時半から			
26	読書会 13時半から		映画会 お休み		7月1日	2
3			映画会 お休み			9 写経会 13時半から

読書会

6月13日

6月27日

(火) 13時半

写経会

7月9日 (火)

13時半

映画会

変則日程ですが
開催します

活動範囲が狭まるに従って自身の見聞や思考の自由度が狭まるかといえば決してその様なことはなく、私は7年前に会社生活をやめて北関東の矢板の地に居を定めてから、逆にものの見方や思考の視野が格段に広がったことを実感しています。会社員時代の30余年間に海外に出張に出かけた回数は30回は下らず、日本国内も出張で足を踏み入れなかった県はひとつもないはずです。かといって活動範囲の広がりには比例して人との関係性の範囲も広がった訳では決してありません。退職時に段ボール一箱分ほどあった名刺を全て破棄しても、その後の7年間、困ることは何一つありません。会社員時代はあくまでも「私（存在）」とのではなく、「会社員（属性）」との関係性であったことがよく分かります。相手はビジネスのクライアントやパートナーや競争相手ですから、自ずとビジネス目的達成（利）のための狭い関係と行動に限られていたのです。

退職後私はそれまでの関係性を維持しようと望むこともなく、きっぱりと属性の衣を脱ぎ捨てることができました。実際、私が望まなくても仕事の切れ目が縁の切れ目だったので、私自身も相手も会社員でない私と「利」による関係性を維持する必要性がなくなった途端「利」から解放され、私は何者でもありうることのできる自由を得ることができました。それは私が出家することで可能になったことに違いありません。

今まで人から出家の理由を問われると自分自身でもなんと答えてよいか分からないところがありました。コロナ禍でこの3年間行動範囲が極端に狭められただけでなく、半年前の発病で自らも行動範囲を制限せざるを得なくなり、現在徒歩圏内は半径一キロ、車の運転は20分以内の距離に行動範囲を限定している状態です。しかしその様な物理的な制限の中でも、私の見聞や思考は制限されることなくコロナ禍や発病前と変わらず自由に飛び回ることができています。人と会って語り合い、場所を訪ねることが生きることの豊かさをもたらす視野を広げることに繋がると思われがちですが、そこに「何かのため」という動機が加わった途端、私たちの関係性はその達成のためにみる間に狭くなってしまっているのではないのでしょうか。その時私たちの目は見たいものや見る必要のあるものにしか入らないという恣意的な選択が行われているのです。つまり「観る」ことでの自由を自ら放棄してしまっているのです。私は出家によって「ありのままに観る」という視点を手に入れることができました。あわせて「何かのため」という動機を手放すことができるようになりました。結果的にはこのふたつを自らのものにしたかったがために私は出家したことになります。そして物理的な活動範囲の制限は「ありのままに観る」ことを阻害せず、逆にその「観る」を研ぎ澄ますことに働いているようです。

10年前に師匠の下で出家得度式を行った時に、私も出家者が必ず唱える偈文「流転三界中 恩愛不能断 棄恩入無為 眞実報恩者」を唱えました。これは仏への出家者の決意を述べた言葉です。迷いの世界（三界）の輪廻を繰り返す（流転）間は、肉親血族の情愛（恩愛）を断ち切ることは不可能です。俗世間の情愛を棄てて（棄恩）仏道の世界に入る（入無為）ことが本当の意味で恩に報いる（報恩）ことになるのです。「恩愛」は肉親や親族や同質の利を志向する社会への愛着です。それは社会に執着し、また束縛された愛です。その社会と相容れない別の社会との軋轢を生み出す愛です。仏教では「恩愛」の世界にとどまる限りは、愛着（執着）の苦しみから逃れることはできず、輪廻転生を繰り返すと考えます。流転の鎖を断ち切る唯一の方法は仏道（無為）の道に入ることです。しかし現実には私たちが生きていく場所は俗世間しか存在しません。俗世間の中で出家し「恩愛」を棄てて、いかにして仏の「慈悲」を獲得するか、それが私たち出家者に与えられた仏からの課題です。得度式で与えられたこの課題の実現のために仏教者の「行い」があるのです。

当初仏教は出家集団を対象に個人の救済を志向する教団でした。しかし俗世間との関係を断ち切った（出世間）といくら主張しようが、人は食料を得て雨風をしのがなければ生きていくことはできません。出家集団を維持していくためには俗世間と違うまた別の社会（世間）が必要になるのです。そこに社会がある限り愛着や束縛が生まれます。ここに小乗仏教の出家主義は限界に達してしまっただけです。そこで起こった在家仏教者の原点回帰運動が大乗仏教です。自己の救済だけに主眼を置き、出家者だけを対象にする仏教を否定し、個人の救済が他者の救済をももたらすという菩薩行の思想です。自らの悟りのために修行し努力することと、他の人の救済のために尽くすこと。この二つを共に完全に行うこと（自利利他）の実践です。一切の衆生と共に悟りを目指し、一人残らず平等に悟りを獲得するまで修行の歩みを続ける行いです。菩薩行には完成形はありません。なぜなら実践し続けることそれ自体が菩薩行であるからです。そしてその実践そのものが「眞実報恩者」たらしめるのです。それが「恩愛」を棄てて「無為」に入り「慈悲」を獲得することです。

日本では僧侶を名乗っていても、実質的には在家仏教者でしょう。妻帯肉食飲酒を含め、殆どの僧侶が厳しい戒律と無縁の社会生活を送っているはずですが、かく言う私も僧体をしてはいますが、それは一度出世間（得度）してまた眞実報恩者たらんとして在家で「願い誓い行う」実践者としての僧体です。それでは私は一度出世間することで何を得たか、それは「無為」の視点を得たことです。仏教用語では「無為」は生滅変化（輪廻）を離れて常在絶対の眞実（慈悲）の視点（悟り）を獲得することです。日常語に即していれば自然のままに作為するところのないこと、つまり「ありのままに観る」ことです。仏教の教えに入ることは「無為」に入ることです。「ありのままに観る」ことにも完成形はありません。ありのまま

琉游舎：戸井 出琉・恭子

であり続けようとするのが、そのまま菩薩行の実践であり続けるために、[問い合わせ：0287-53-7848](tel:0287-53-7848) [08033508152](tel:08033508152)
私は何かのためという動機を手放した今、僧侶という属性も手放すことが、[矢板市大槻2319-17](tel:0287-53-7848) [コリーナ矢板C-850](tel:0287-53-7848)
これからもありのままに居続けられる秘訣ではないかと考え始めているところです。 [メール：toi101izuru@outlook.jp](mailto:toi101izuru@outlook.jp)